

子どもにラブレターを

中学生の息子は、反抗期真っただ中。言うことは聞かない。尋ねても答えない。親子げんかもしばしばです。

2年生になってしばらくたったころ、家庭訪問がありました。息子のことを相談すると、先生は笑顔で答えてくださいました。

「思春期の子は、つっけんどんな態度をとったり、反発したりしながらも、愛情を求めています。」と。そして、

「こんな時期だからこそ、自分が大切にされていることを感じてもらいたい。そう考えて、保護者や身近な人から子どもにラブレターを書いてもらう取り組みを進めています。御協力ください。」と言って、封筒と2枚の便せんを置いて帰っていかれました。

子どもに手紙など書いたことのない私はずいぶんと悩みましたが、息子との思い出や大切に思う気持ち、親としての願いをしたためることにしました。何枚か書き直した後、先生からいただいた便せんを取り出し、清書しました。そして、書き上げた息子へのラブレターを学校に郵送しました。

しばらくたって、帰宅した息子が何か言いたそうな風だったのですが、結局何も言わず、学級通信をおいて、自分の部屋へ上がって行ってしまいました。何があったのか事情がつかめないまま、学級通信に目をやると、例のラブレターを使った学習が行われたこと、その時の様子については、学級懇談会で先生が話をされることが書いてありました。

数日後、学級懇談会が開かれました。手紙を読んでいる間は、照れ笑いを浮かべる子、涙を流す子、黙々と何度も読み返す子など、様子はさまざまだったけれど、読み終わった後は、多くの子が明るい表情だったと話されました。周りの保護者からは、「どことなく表情や態度が柔らかくなった気がします。」「手紙を読んだ日、妙にいつもより可愛らしくて素直だった。」「最近、単語でしか話さなかった子どもと会話ができるようになった。」といったことが出されました。

うちの息子は、特に変化がないことに寂しさを感じていた時、先生から「子どもたちからおうちの方への手紙があります。」と言って、一人ひとりに手紙を配ってくださいました。おそるおそる封を開けると、そこには、いつもよりちょっぴり丁寧な字で、「ありがとう。オレ、がんばるから。」とだけ書かれていました。普段、ぶっきらぼうな息子がどんな気持ちでこの一文を書いたのか想像すると、胸が熱くなりました。

「あなたが大事」

この気持ちだけは、相変わらずぶっきらぼうな息子に伝え続けようと思います。